

Title	Psycho-Paidologyに於ける解釋について
Sub Title	
Author	宮下, 正美(Miyashita, Masami)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1930
Jtitle	哲學 No.6 (1930. 3) ,p.249- 268
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000006-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Psycho-Paidology に於ける

解釋について

宮 下 正 美

現象を説明するといふのは、その現象を生ぜしむるに至つた原因を發見して、これがある一定の法則に歸納せしむることである。このことは凡ゆる科學に關して言はれ得ることと凡ゆる科學の終局の目的と考へることも出来る。而してかゝる考へ方が心理學的研究に於ても許容せられ得るや否やは極めて重要な問題であつて、既に幾多の論争の行はれ來つたことは遍く人の知るところである、が、かゝる論争を詳細に検討することは今の場合これを避けて、我々はこゝに只事實上ある一つの心理學的原因をある一つの心理學的過程

Psycho-Paidology に於ける解釋について

に結合してそこに必然的關係を推定することのよくあることを述べるだけに止めやう。例へば私が路傍で一つの叫聲を耳にして、直ちにその聲の起つた方向を見んとして頭を廻らしたとすれば、この場合には「私の注意がこの音（叫聲）の知覺によつて喚起せしめられた」といふことになる。併し乍ら、心理學的原因は物理學的原因に比すれば極めて不正確且つ不明瞭である。物理學の世界にあつては極めて深い本質的な方法によつて原因と結果は容易に結合せしむることができる。結果は延長せられたる原因に他ならず、變形せられたる原因（エネルギーの變形）に他ならない。然るに心理學の世界にあつては原因と結果との間に共通の素因と見られるやうなものが一つもない。二つのものは根本的に性質の異なる現象である。二者の間には單に繼續的前後關係、偶然的ではあつても必然的でない繼續的關係が認められるに過ぎないのである。もし私が

「シーザー」といふ言葉を口にしたために聴く者をして「ローマ」なる觀念を想起せしめたとすれば、一般にはこれ等の觀念の一つが他の觀念を生んだものであるが、その實我々にはこの「ローマ」なる觀念を喚起せしめたる所のものが如何なる心理的機制であるかといふことになる。少しも判らないのである。觀念の聯合とか結合とかいふことをその本質も識らず又如何なる手段によつてそれ等の觀念が結合するかも判らぬやうなある關係について只そう考へるだけなのである。

加之、心理學的原因是精神生活を説明するには不充分なものである。如何となればこの原因たるや何らか排除したる所のあるもので即ちいつでも我々の意識現象はこれに先行する心理的現象によつて起されるものだからである。例へば前掲の例によれば、路傍に於ける叫聲の知覺の原因は何であるかといへば叫聲そのも

のであつて、これは物理的現象即ち自分の耳朵を打つて響いて來た空氣の波動である。

言ふまでもなく我々は純粹なる心理學的法則は之を作り出すことが出来る、例へば私自身の記憶力が年と共に減少し、注意力が年に従つてある一定の割合をもつて増加して行きこれが凡ゆる精神を通じて普遍的であるとするならば、この公理即ち恒常的關係を表はしてゐる心理的法則の存在することは敢てこれを否定するものではないが、もしこれ等の法則のもとにあつてかゝる現象が如何に進歩し如何なる理由によつて進歩するものなるかを指示するところの機制を理解せんがためにこれらの法則を深く研究するならば、換言すれば、もしこれ等の法則を更に一般的なる法則に歸納せしめんとするならば、遂には心理學の範圍を越えて生理學の分野に深く滲透して研究しなければ全然理解が不可能となつてしまふ。

かくて——「心理學的説明」は結局、「生理學的説明」によつてとつて代はられなければならない。凡ゆる心理的現象に相應するものが神経中樞の裡にあつて、これが即ち生理的現象である（物心並行論）。物理的原因は只一個獨立したるものでなくして一つの關聯的な環を作し、意識現象の系列中に於ける場合と同様に原因と結合する連鎖は突然これを截斷することが出來ない。生理的説明によつて得られる特殊の利益は精神生活の凡ゆる現象を物理的法則の裡に歸着せしめ得ることであるが、又物理的法則なるものは更に一般的なる機械的法則に歸着せしむることを得、かくの如くにして凡ゆる宇宙の現象をすべて電子の運動に歸着せしめ、或は繼續的な變化を正確に豫見し且計量することの出来る「エネルギーの變化」といふ事實に歸着せしめ得るもので、即ち自然科学の最も根本的な思想にまで還元せしめ得るところの利益があつた——。

Psycho-Pathology に於ける解釋について

かくの如くある種の學者は凡ゆる場合に人間を恰かも機械に他ならぬものゝ如く考へて、精神活動なるものは細胞機制の法則に基く單なる活動に過ぎざるものなりと説明するに至つた。生理學者としては當然の態度であるかゝる態度程正しく且つ明瞭直截なるものはあるまい。然るに多くの生理學者は彼等に許容せられたる有機的現象の説明及び理解にのみ満足せずして、更に進んで心理的現象の分野に入りこみ、精神の機能そのものさへも有機的に説明せられ得るものゝ如く考へ、精神そのものゝ獨自的存在を否定せんとするものゝ如くに論争してゐる。

併し乍ら生理學者によつて求められた以上の如き精神そのものゝ有機的説明による獨自性の無視は次に述べるんとする二箇の理由によつて排斥せられる。即ち第一に細胞生理學なるものが現今に於ては精神活動を充分に説明し得らるゝ程完全に進歩してゐないのみなら

す、實に純粹なる客觀的方法の記述といふことすら充分なる發達を遂げてゐない状態であり、第二に有機論者の見地は心理學者の見地に比すれば極めて狭いもので、心理學者に充分なる満足を與へ得ないといふ困難がある。我々は既に、機制の問題であり How が問題の核心をなす所の構成問題の他に、更に精神活動には機能問題即ち Why 問題の存することを識つてゐる。

然るに生活を維持せんが爲に精神活動は如何なる役割を演じてゐるか或は如何なる必要を認むるか、如何なる過程を必要とするかといふ如きことは機械論にとつては何の意味もないことで、即ち機械論は原因以外の如何なるものをも省みないのである。併し乍ら原因を考察するのみにては如何にしても充分に心理學者を満足せしむることが出来ない。何となれば精神は豫め知つて計つてをいた將來の要求に豫め順應しその要求或は興味を満足せしめ得るやうに準備せしめ、一定の目

的に向つて個々の行爲を指導展開せしむるやうに出來てゐる機械であるからである。

次に示す例によればこれらの見地の相違は判然とする。例へば路上を一目散に走つてゐる友人に向つて我々が、「何故君はそのやうに走つて行くか」と尋ねたとする。この友人が之に答へて、「私の脚の筋肉や運動の中樞が一定の科學的生理的過程の中心にあるからかうして走つてゐるのである」と言つたならば我々は必ずこれは悪い冗談だといつて非難するであらう。然し友人が「汽車に乗り後れるといけないからこんなにして走つてゐるのだ」と答へてその行爲の目的を説明した場合に初めて彼の行爲が心理學的に説明せられたことになるのである。

それ故に心理學に於ては原因に關する説明の他に更に「理解といふ言葉によつて區別せられてゐる目的々説明にも位置を與へなければならぬ。心理的過程を充

分に終始せしむる所の興味の何たるかを明らかならしむるのが即ち「理解すること」に當るのである。原因のみに基く説明は外部から心理的過程を研究するものであるが、理解するといふのは内的に自我の見地から本質的な心の見地から考究するものである。かくの如き「理解せんとする要求」は心理學に於ては避くべからざるもので、心理學がよく整理された一定の行爲に就いて説明する場合には、假令この行爲が内省によつては認められない場合でもこれを心理的過程によつて支配されてゐるものと考へる。同様に走つてゐる友人に向つて、「彼は何が故に走るかを知らずして走り、單に足が急速に運動するのみにて何らの目的があるわけがなく、又どこへその足がついてどんな工合に運ばれてゐるかといふことには無知である」と断定したとすれば、この場合には我々はこれを説明する爲には友人の自我の底を通つてゐる自我即ち潜在意識或は半意識

Psycho-Paidology に於ける解釋について

の存在を認容する。友人はなる程自身では何が故に走つてゐるかを知つてはゐないが、彼の半意識或は潜在意識にあつてはこの走るといふ事實は満足に到達點にまで行かしまゐる一つの目的或は興味が存在してゐるのである。この活動は機械的（無意識的）なものである。併しそれは心理學的機械的動作である。簡単に云へば動機（原因理由）が明かにせられた場合に於てのみ始めて現象が眞の意味に於て理解されるのである。然るに動機に關する觀念は機制からは遠去かつてしまふのである。

かくの如き目的々説明はこれを更によく考へて見れば原因的説明とは決して相反すべきものではない。前者は矢張り後者の裡に歸着せしめ得られる。汽車にうまく乗後れぬやうに走つてゐると答ふる代りに「友人は汽車に乗後れることを恐れて、それでかくも走つてゐる」と答へても差支えはない。この場合には恐れる

といふことが友人の走ることの原因である。この恐れ
の過程及びそのなすところの仕方は心理學に於ては知
ることを得ざるものであるが、その機制には説明すべ
からざる豫見の要素を含んでゐる。併し乍ら假に心理
學がある一定の心理的現象の外部的説明の裡に生理學
の外部的説明と一致する觀念を含ましむるものとすれ
ば、心理學は意識の事實を嚴密にその原因に於て表は
し得るやうに努力しなければならぬ。

かくの如き目的の機械的説明を試みることは正しい
ことである。これは生物學が我々にその例證を開示し
てくれたものである。生物學は生命の現象を目的の方
面より研究する點に於て心理學と區別せられる。心理
學は現象を生起させた原因に基いて現象を研究せんと
するものであるが、生物學はこれに更に組織の觀念を
導入する、即ち生物學はこれ等の現象のある一定のも
のは極めて特殊の方法によつて相互に結合してゐるも

のと考へ、更にこれ等のものが一つの全體を構成しこ
れに關聯して各現象は研究せられなければならぬと考
へるのである。生物學はかゝる全體としての生命の安
全を維持するといふ點に於てこれ等の現象のあるもの
が如何なる作用をなしてゐるかを研究するものである。
それ故にその見地は機能と目的にある。併し乍ら生物
學が研究せんとする諸現象は目的或はプランに應じて
自己自身を向けて行くことを許容しない、例へば動物
の本能の中でも特に顯著に感心させられる將來の豫知
といふ如きことは實際には存在しない。それは單なる
外見上の姿に過ぎない。自然の終局の目的は盲目的な
選擇の結果に他ならない。即ち環境の状態はこの環境
と一致することの出来る機制の存續のみを許容する、
生存してゐるものは凡て明かにこの環境に偶然に順應
してゐるものなることを發見する。換言すればこの生
存の目的なるものは後に至つてのみ作用するものであ

る。即ちこれは原因に非ずして結果である。

如何なる程度までかゝる考へ方は正しいか。事實上多くの生物學者は目的なるものは單に後に至つて現はれるものではなく、更に現象の進化の中にも眞面目に織りこまれて來るものであることを許容してゐる、即ちこれが活力論者のいふ所のものであつて、現今にあつてもこの種の主張を有する學者は尠くないがそれは兎も角、生物學はかゝる活力論の「終局原因」なるものから完全に脱却することの出來た際に始めて心理學に參與する要求がなし得られるのである。

同様に心理學も活動を內的活動の目的論に求めることなくして説明し得らるゝ範圍に於てのみ生物學に關係し得らるゝのである。併し乍らこゝにその場合が生物學に於ける場合と些さか異なつて來る。生物學に於てはかゝる目的に關する幻想は生物學者の事實を考へる精神に於てのみ發見せられるもので、事實そのもの

ゝ中に發見せられるのではない。然るに心理學にあつてはこの目的に關する幻想は事實であつて、視察によつて考へられた事實に他ならない。我々はそう考へないでは個人の行爲を心理學的に理解することが出來ないのである。

假令理論的心理學はそれが單なる説明以上に出ない限り「理解」なしにでもすませ得るものとしても、技術的心理學即ち科學的實驗心理學に於てはこの「理解」なるものは極めて必要である。何となれば何らかの化學的藥品を注射して外部よりある個人の精神状態を變形せしむるといふやうなことは僅かの範圍に於てのみ可能ではあるが、全般よりこれを見れば「理解」といふことなしには何事もなし得ないからである。精神病の醫師も學校の教師も患者や生徒を全般に涉つてよく理解し、その興趣、その要求、その全人格の發展を容易ならしむる要素或は困難ならしむる要素を理解する

ことから始めなければ醫師はその患者を治癒せしむることが出来ず、教師はその生徒を正しく且つ巧みに教導して行くことが出来ない。

往々にして心理學的生理學的原因の解釋も心理學的理解も十分に心理的現象を説明することの出来ぬやうな場合に遭遇することがある。感情に關する問題に對して特にさうである。例へば羞恥といふ感情について考ふれば我々はその心理的原因も生理的原因もこれを知ることが出来ない、又その變動する性質も動機も知ることが出来ない。暗黒を怖れるといふことに就いても矢張りさうである。一體暗黒を怖れる場合には兒童の腦の組織に如何なるものが生ずるのであらうか。この現象は何を意味してゐるものであり何が故に起るものであらうか。兒童はよく怖しさに震え戦くものであるがそれが何故であるかは判明してゐない。兒童自身でもよく判つては居ないのである。かゝる場合には心

理學者は躊躇することなしに「生物學的解釋」を用ひる。この生物學的解釋が心理學的事實の研究に密接に關係してゐることはスタンレー、ホールの業績を見ても知られる。發生的心理學と稱するものは即ち心理現象の生物學的方面よりの研究に他ならない。而して心理的現象の生物學的解釋とは乃はち我々の眼前に提供せられたる心理現象が種族及び個體の保存に對して如何なる利益があるかを検討して之を決定することに他ならぬ。我々は多くの學者によつて、特に遊びの研究に關して述べられてゐる部分に於て、如何に心理的現象の生物學的研究の重要であるかを力説しつゝあるのを見るのであるが、實に遊びの研究はこの方面の研究を度外視しては到底なし得られざるものである。

即ち以上に述べた所を約説すれば心理學者に對しては三種の解釋法が與へられてゐるわけである。一は機械的解釋、二は生物學的解釋、三は心理學的解釋であ

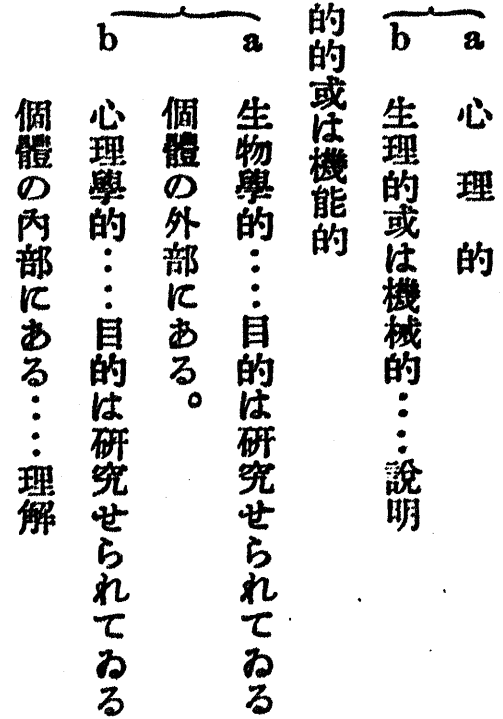
る。我々は解釋に當つてこれ等のものを交互的に用ひることもあり、或は同時に用ひることもある。これらものは相互に補正するものであるが、時としては一つのみが可能の場合もある。機械的解釋はこれを簡單にいへば凡ゆる見地の背後に更に徹底したる抽象的活力を豫想して外部より組織的に現象を考へるものである。生物學的解釋は矢張り外部から凡ゆる現象を有機體と結合して考へ、又これ等の現象がこの有機體の生命の持続に對して如何なる役割を演じてゐるかを考察するものである。心理的解釋といふのは現象を内面より考察するもので、即ち要求、希望、興味を有する意識的被験者の立場から、これ等のものを満足せしめんとしてゐる有意的被験者の立場からこれを考察するものである。次にこれを表示して見やう。

解釋

一、原因的

Psycho-Paidology に於ける解釋について

二、目的的或は機能的



扱。心理學者が直接に觀察することを得る唯一の精神活動は心理學者自身の精神だけである。他の個體の精神過程を研究せんとするには、彼の感覺に上つて來たゞけの客觀的現象を心理學上の用語に翻譯し類推によつてこれを解釋して行かなければならない。而してこれは次に示すやうな比例法の形式によつて示すことが出来る。

$$\frac{\text{私の意識の現象}}{\text{私の認識}} = \frac{\text{X}}{\text{他の個人の認識}}$$

我々自身に極めて類似してゐるものに關する限りかゝる客觀的——主觀的解釋は本能的に成立せられ何等の困難もあり得ない。併し乍らその作用し現はれる感情や思考や運動が、もし我々がそれ等と同一の境遇に置かれたならば我々自身に於ても發見せられるものと同一であるといふことが確實に推論し得られない爲に、我々とは全く異つてゐる生物に關して調査を行ふやうな場合には、最早この場合とは異なるのである。この種の解釋が必要なのは特に動物の行動に關するものである。そこである學者の如きは動物はかくの如く人類とは異つてゐるものであるから、動物心理學といふやうなものは全く組織し得られないこと、又動物の研究にあつては單に直接に觀察者の感覺に映じ來つた彼等の表現即ち有機的現象、生理的現象の研究以上に出すべきものではないと考へてゐる。

兒童に關しては明かに動物に關するものよりもかゝ

る困難は減少する。即ち兒童は我々に極めて近似し又その言語動作によつて彼等の希求する所感するところのものに關して多少とも察知し得られるからである。併し乍ら次にこの實に同じ理由のために心理的解釋は極めてデリケートなものとなる。如何となれば動物に對してよりも更に「擬人論」の傾向を濃くするからである。即ち兒童の精神を成人の精神と同様の條件をもつて理解せんとする傾向を有するからである。兒童研究に従事する場合に最も慎重に考へなければならぬことは従來多くの學者によつて屢々注意せられたるが如く、兒童は成人の縮圖でもなければ倭人でもないことである、即ちその精神は單に我々成人とは量的に異なつてゐるのみならず又更に質的にも異つてゐる。兒童は常に「小さき」存在であるのみならず、「異なる」存在である。故にいつでも *Psycho-paithology* に於ては一般心理學に於てなされる注意や研究態度とは多少異なる。

れる態度をもつてこれに臨まなければならぬ。

次にある一過程の心理學的解釋に關聯する凡ゆる諸問題は次に示す三箇の要點に歸着せしめ得られる。

一、精神性の問題

二、複雑性の問題

三、機能の問題

以下これ等三箇の問題が *Psycho-Paidology* にあつて如何なる考慮のもとに取扱はれなければならぬかを簡単に述べて見やう。

一、精神性の問題

精神性の問題は兒童に對しては全く必要のない問題である。結晶體や植物や昆蟲類が精神生活をなしてゐるか否かは明かに問題となすことが出来るが、兒童に關する限りかゝる愚かしき疑問を挿む餘地はあるべき筈がない。

Psycho-Paidology に於ける解釋について

然るにある種の人々は兒童が表示する所の心理的過程を研究したり解釋することなく、單に兒童の客觀的表現例へば反射、分泌作用、反應等にのみ觀察の焦點を置き、主觀的解釋は全然これを認容しない。ベッツエリュの如きがこれである。嚮にも述べた如く、生理學者にとつては純粹に生理學的方法によつて人間の行爲を説明せんと企圖すること程合法的なことではない。これは常に彼等の權利であるのみならずその義務でもある。併し乍ら何が故に客觀的心理學(ベッツエリュ)の主張が意識的事實がその科學の構成に用をなさぬといふ理由によつて明確に認められる部分をもとつてこれを心理學の對象としないか。客觀的心理學の主張者はある點に於ては、自分はトマトを食することが出来ないから他の者にも食べさせまいとする鳥の番犬によく似てゐる。かくの如き態度は明かに科學的態度と背反してゐる。假令一つの方法が不當なるものであると

してもその方法による結果の不成功がその事實を充分に明かにする。これを許容するもこれを禁止するもそこに人為的な作為を施す必要がない。而して何故に客觀的心理學の主張者が歸結する「反射の法則」がこれと反對の立場にある心理學者の「反射の法則」に比して更に性質的であり更に優れてゐると云はれ得るか。

從來客觀心理學の企圖は餘り興味あるものではなかつた。生理學的名辭の心理學的概念への代用は屢々見掛け倒しのものであつた。我々に記述してくれるものは生理學的色彩を多分に帯びた心理的事實そのものであつた。而してベツツエリユに悲しみ、悦び、怒り、怖れなどを區別せしめたものはこれ等の状態にある心理的知識であつた。即ちもし彼が嘗つて悲しんだこと

なく或は悲しんでゐる人がその悲しみの状態に就いて彼に何ごともし話したことがなかつたとしたら、彼は實際單なる悲しみの状態の客觀的特徴のみからこの現象

を他の現象と區別してこれを決定することが出來たかどうかは疑はしい。

往々にして例へば實驗教育學に於ては必しも主觀的解釋を必要としなくても單に客觀的結果から説明し得られる場合のあることは明らかである。例へばある實驗によつて甲の教案より乙の教案の方が更に秀れた客觀的結果を獲得せしむることを示す場合には我々は何等の心理的理由とその説明とを要求することなくそのまま乙教案をもつて可とすることが出来る。併し乍ら一般的には客觀的心理學は即ち心理的教育學は現實に單なる神経系統の生理學の漠然たる概念や粗雜なる構圖に満足する以上に更に兒童の活動そのものゝ推移の状態に就いて深い分析と綜合とが必要である。

二、複雑性の問題

精神性の問題に反して複雑性の問題は極めて重要に

して且つ興味あるものである。こゝに考へられる問題は精神過程の構造が精神の段階に於て複合してゐるものであるか單純なるものであるか高等なるものであるか下等なるものであるかの過程の構造の程度の判断といふことに關係してゐる。即ちある精神活動は判断、推論の結果であるか、或は觀念の聯合持續の結果であるか、又それが生得的本能的のものであるか、A兒童は聞いたことは何でもその意味も判らないのにペラペラと反復するが彼は果してその云ふ所を理解してゐるであらうか、嬰兒は個々の名稱をある一組のあらゆる物象に適用して之を用ひるが、これは彼がその觀念を一般化してゐることを示してゐるものであるか、こゝに一人の惡癖の匡正せられたる兒童を假定してこれはそもゝ體罰の恐怖の結果であるか又その道徳的感情が成長して來たためであるか——等である。

併し乍ら目下の所かゝる複雑性の問題を解決せしむ

Psycho-Paidology に於ける解釋について

る絶對的方法はない。併しこの點に關してはロイド・モルガンが動物心理學者に與へたモルガンの法則の中に述べられてある科學的解釋の一般的原理即ち「經濟の原理」を心得てゐる必要がある。即ち「もし一つの精神活動が心理段階に於て最も低き位置に存する作用の結果として考へ得る場合には如何なる場合にも精神活動の高められた高尙なる精神的能力の結果であると解釋してはならぬ」。

以上が所謂モルガンの法則であるが、兒童を心理的に研究せんとする人々もこれに就いては深く考慮しなければならぬ。但しこの法則の適用は極めて困難ではある。何となれば常にある能力が他の能力よりも高尙であるか否かは判るものではないし、又我々が極めて無雜作に最も經濟的であると考へてゐる所のものが果して最も單純で且つ經濟的であるかどうかも明かにすることは不可能である。又遺傳的本能的行爲は多少と

も後天的行爲や模倣の行爲に比して經濟的であるか否

か、この解決も亦不可能であるといつてよい。一方に於て本質的なものと考へられる所のものが常に我々が最も簡單なものとして認めることの出来る過程であるとは考へるわけには行かぬ。假令最も經濟的な方法によつて兒童の精神生活の説明を、求めることが正しいものであるとしても、更に進んでかゝる單純性がよく事實と一致してゐるか否かも確かめなければならぬ。

これよりも更に重要な解釋の原理は、兒童の一般的行爲の標準に照して兒童の行爲を判斷せんとする所のものである。我々は兒童の云ふ言葉に抽象的の意義の存するものとは考へない。即ち發達の諸段階にある兒童の行爲や言語をある一定の統一的説明によつて批判してはならないのである。デカルトが動物の工業的本能は他の方面に現はれる彼等の行動の無能無知と照合して考ふれば決して知的な現はれとして考へてはなら

ぬといつたのは有名な言葉である。

次に第三の原理として「モイマンの原理」といふものがある。この原理は特に言語に關する諸現象の解釋のために作られたものであるが、又同時に更に一般的な諸能力の解釋にも適用せられ得べき原理であるやうに思はれる。即ち今視察せんとする兒童の言語のこれより以後の發達状態の視察によつてこの發達過程の有する諸性質を過去に溯つて判斷するものである。例へば言語に於ける抽象作用といふことが明瞭に認め得らるゝに到つた時代にこれを觀察してこの時代以前には確實に抽象作用といふものが缺けてゐたことが明かにせられたならば直ちにこの時代以前には抽象作用はないものとして過去反省的に決定するのである。かゝる研究の結果例へば六歳兒の深い研究は同時にそれ以前の五歳兒乃至四歳兒の精神性を更によく理解することになる。明かに此の方法はモイマンも云つてゐる如く

消極的方法である。即ち如何なる種類の説明の原理は排斥せらるべきであることを示してゐるに過ぎないものであるが、これも解釋の方法としては實に見逃すべからざる重要な位置を占めてゐるのである。

三、機能の問題

以上に示したるが如き種々の方法やその補助手段或は解釋法の如何に係はらず、兒童の精神的過程の本質を解釋せんとする場合には絶對的に回避しなければならぬものでありながら而かも容易に回避することを得ざるが如き危険なる一事がある。これは嚮にも一度述べたことのある「擬人化」といふことで、更にこれを判り易く云へば成人の標準をもつて凡ゆるものを解釋することである。兒童の精神過程を成人の精神過程を測定する方法をもつて測定し一般心理學の標準を適用することは事實當を得ざるものであつて、實際教育に當つては危険この上もなきものである。何となれば兒

童をその當然の精神活動以上の範圍に在りて苦しめなければならぬからである。即ちこれは兒童の精神過程を成人の精神過程と全然同一のものと考へ或はその精神過程に正確に一致するが如き過程の發見せられざる場合には兒童は此の種の過程を缺いてゐるものゝ如く見做し或は兒童の精神過程を全然一致せしむることのできぬ成人のある精神過程と結び付けんとするが如き無理が生じて來るのである。

例へば我々が大都市の描寫に用ふる言葉や概念をそのまま使用して片田舎の一村落の有様を描寫したとする。我々はそこで「城」といふ名前を道傍に建てられてある質素な尼寺に與へ或は「市役所」なる名稱を粗末なる村長の住宅に與へ、或は「中央刑務所」を小泥棒を監禁してをく小さな分監場に與へ、「公園」を狭い梅の林に與へたとする。或はこの反對にこの村落には公園も市役所も中央刑務所も城も全然なきものと考へ

る。然る時我々はこれ等の二つの場合に單に表面的に考へてかうすることは兩者ともある種の間違ひをなしてゐるものと考へ得られるのである。何となれば假令この村落には刑務所はないとしてもこれに代る機關なり組織なりが大都市の生活に於ける中央刑務所の役目(機能)を果たすものとして何らか存在するからである。

以上の例は極端な且つ餘りに粗雑な比較の例であるが、兒童の精神過程の解釋は如何にして行はなければならぬものであるかを理解する一助となるものである。我々は兒童が成人の有するが如き精神過程を有してゐるか有してゐないかといふやうなことは考ふべき事柄とは思つてはならぬ。アーヴン・グキングの云へる如く、「兒童は兒童自身の言葉に於て解釋せらるべきである」のである。I、E、ミラーもこれと同じく考へてゐたと見るべきで彼のとつた例によつてこの事實を裏書して見やう。

「幼い兒童は思考作用を有してゐるか——今以上の如き一個の問題が提出せられたものとする。この問題に對しては兒童の精神過程を成人の精神過程と同一のものゝ如くに考へてゐる人々は明快にかく答へるであらう。それは勿論である、彼等は考へるから、而して考へるといふことは推理することに他ならぬから彼等は思考作用をもつてゐる」と。又この種の考へに反對する人は云ふであらう、「兒童は決して推理もない、故に思考作用を有しない」と。

然らば何人が推理するか、これは成人である。而してこの決定論に存する重大なる誤謬は彼等が成人の完成したる型式に於てのみ思考作用を考へ推理の事實を知つてゐることに存する。併し乍ら兒童は考へるものなりと思推するならばこのことには何の間違ひもないのであるが、只それ故に推理すべきであると歸納する所に間違ひが存するのである。又これと反對に兒童は

推理しないことを認めるならばこのことは間違ひはない、只彼等はそれ故に考へないと推論するところに間違ひが生じて來るのである——。

解釋上の誤謬は實に我々が成人の精神的過程を兒童の精神的過程の標準として考へてるところから生じて來るものである。

この例は明かに複雑性の解釋は常に機能的解釋に従屬すべきものであることを我々に示してくれる。故に我々は先づ精神的過程を表示するところのものが如何なるものであるかの研究から着手しなければならぬ。而してかゝる過程が兒童の精神生活に如何なる役割を演じてゐるものなるかを研究しなければならぬ。而して後はじめて如何なる形式に向つてこの機能の完成が向けられてゐるかを研究するのである。更に進んでこの精神的過程が個體の發達に對して如何なる意義を有してゐるかを研究する。併し乍らこゝに意義とはいつ

ても決して成人の見地からは考へ得られぬ所のものである。何となれば成人の精神的過程の中には兒童の如き精神的状態は決して存在してはゐないからである。例へばもし我々が兩棲類はその幼蟲時代が水棲動物であることを知らなかつたならば蛙の鰓が何が故に存在してゐるかを理解し得ないと同様である。併しこの點に關しては既に發生的機能的研究が充分に發達してゐることでもあるからこゝではこれ以上に説く必要はなからうと思ふ。

かくの如く解釋の問題は實際教育に於ても極めて重要なものであるから次にデューイによつて示された發生的——機能的解釋の重要性とその方法とを裏書きする一つの例を示すことにしやう。

今多くの兒童を調査したる結果、八歳の兒童はその七十三パーセントまでローマの警察官ニツク、カーター等によつて示されたる所謂「犯罪的」偏愛を経験し

これを表明したものとす。然らば如何にこの事實を解釋するか。この事實より我々は如何なるものを抽出することが出来るか。もしこれを單純に成人の有する知識の光に照らして考へるならばこれは何らの興味もなくすまじ得ることである。假令これ等の事實を記入し分類し命名し歸結してもそれ等の何れからも何らの説明も導き出すことが出来ない。然るに一度目先を變へて發生學的解釋をこのものに適用すれば、この極めて價値のない涸淡にも思はれる事實が理論的にも實際的にも極めて豊富なる生々としたる事實となつて現はれて來る。こゝでは夫が精神發達の一段階を示す現象であるか或は特に此の發達のある一定の時期の要求に應じてゐる現象なりや、かゝる意義に關する研究が中心となつて來る。同時にその前後關係をも決定せんとする。而して特に二十七パーセントの犯罪的偏愛を

有せざる兒童の精神的傾向をも合はせて研究する。而してこの方法に従つて行けばかゝる偏愛が餘りに嚴格に過ぎた訓戒とその方面より來たれる精神的壓迫に對する反動に他ならぬこと或は自己自身の有する精神的缺陷或は不足を補足せんとする現象に他ならぬことが判つて來るであらう。

我々はさきに再度に涉つて兒童は成人とは全然同一のものに非ざることを述べて來た。實に然りである。その心理的過程は成人の過程とは全く異なる別種の型式を示すものである。併し乍ら同時に又成人と甚だしく接近し或はこれと等しくある所のものがある。即ち活動そのものの一般的機能である。この機能は個體の要求、生命の維持、人格の確立並びに擴充、全體としての完成の満足のために存するものである。實に兒童に於ても成人に於けると同様に活動の法則には變りはない。即ち活動を刺戟する所のものは興味であり要求であつて、成人が目的の完成の爲に努力し發見し思

索する場合に成人が感ずる如く兒童も考へ、想像し希望し努力し得るのである。兒童のこれに用ひる「方法」は異なるものであるが、その「心理的目的」は同一である。お玉杓子と蛙とはその有する呼吸器に於て鰓と肺との相違はあつても呼吸そのことは同一の機能なのである。即ち活動性の存在の理由に於ては共通にしてその型式に於て異なるのである。換言すれば目的が共通であつてその方法が異なるものである。而してかくの如き關係は教師にとつては極めて重要な關係でなければならぬ。然るに悲しむべきことには實際に於てはまさしく此の公式の逆をとつてゐる。即ち我々は精神的機能の形式に關しては兒童を成人と異ならざるもの如くに考へてゐるのである。而して之を特殊の形式を有してゐるもの如く考へるのはかゝる精神的活動の生物學の見地に立つてのことである。一方に於て學齡兒童は一年生も六年生もすべて同一の形式を有し

てゐるもの如く考へて同じ様な教授法をとつてゐるのではあるまいか。而して教授の方法も發表もすべて成人の論理に基き、その知識の模寫に止まり、兒童の各年齢に相應する所の本質的傾向に基いてゐるものと思はれるものは一つだに見當らないのである。即ち教師は國語を文法上の規則によつて束縛しこれによつて教へむとし或は教へ得たと信じてゐる。圖畫の如きも法則とコムパスをもつてあつさり片付けてしまふ。算術に至つては最も手軽に抽象と三段論法をもつて片付けてしまふといつた調子である。而かも多面に於て教師は兒童も矢張り生活せる存在であつて、その手段は結局成人に關聯するところのもの即ち要求と興味とを等しく中心として動くところのものであることには何らの注意も拂はない。而して兒童は恰かも何らかの偶然の事故の爲にこの世に天降つて來た天使であつて、何事でもなし能はざることなし

と信じ、これ等の好都合なる状態を兒童の中に創造せしめんとするものなく、只に成人の知識とその方法とによつて、成人にとつて價値あり意義あるものをそのままに與へてこれが精神發達を計らんとするに至つてはその科學的無知なること探査的情熱に缺くることの淋しさはともあれ、兒童の不幸は實にこの上なきものであらう。